

東京バッハ合唱団 月報

[第 591 号] 2011 年 9 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.591

September 2011

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

野尻湖合宿と湖畔のコンサート (8月5日~7日)

ご報告

3年ぶりの野尻湖合宿

菅原 昌子 (団員：ソプラノ)

今年の合宿は、一昨年と昨年とに、それぞれドイツ演奏旅行と《口短調ミサ曲》の集中練習が行なわれたため、3年ぶりの実現となりました。猛暑がつづいていたので、明日から野尻湖に行けると思うと楽しみでした。

8月6日の神山教会での演奏会では、まずカンタータ第71番《主はわが君》です。ソプラノとしては、何といっても、第2曲のアリア(T)とコラール(S)がうまく歌えるか、心配かつ楽しみ(?)でもあったのですが、なるべくまわりの人と声を合わせるように努めました。きれいに響いたのではないかと思います。ただ練習不足でしたから、もう少し不安なく歌いたかったと思います。

《口短調ミサ曲》からの数曲は、すでにラテン語で歌っているのですが、今回は日本語での演奏でしたので、とても難しく感じました。私の中でじゅうぶんに日本語の歌詞と音符が一致せず、言葉に気をとられていると音が流れてリズムが乱れてしまいます。音楽の流れに日本語の歌詞をのせて歌えるようになるには、まだまだ練習が必要です。これからの課題です。

聴衆の方たちの中には外国人が多かったのですが、今回の日本語での演奏はどのように感じられたのでしょうか。言葉の違いはあっても、すこしでもバッハの音楽を共有できたと思ってくだされば、成功だったといえるでしょう。

いつも多彩な人たちの繰りひろげる身内のミニコンサート(前日の晩)は、今回も、とても楽しみました。

シューベルト「水面(みなも)に歌う」松尾さんご夫妻(B&S)、茂春さんのバリトンも、文子さんのピアノ伴奏もうっとりするほど素晴らしく、水面に水が光ってきらきら輝くような歌でした。



この項の写真(p.1~3)撮影：松尾茂春氏(団員)

ビゼー「カルメン」より「ハバナラ」。川合満里子さん(S)、メゾソプラノの歌う、あの有名なアリアです。声質がカルメンにぴったりではまり役ですが、もっと大胆かつ奔放に演じられても良いのではありませんか?

フォスター「Swanee River」。本田茂樹さん(B)、バンジョー弾きながら。あまりにも有名な歌ですが、私はバンジョーという楽器を初めて見ました。軽快なとても明るく乾いた音のする楽器でした。「トムソーヤの冒険」を思い出しました。

ベルリーニ「夢遊病の女」からアリア。久保庭重夫さん(B)、大変きれいな声質で、すらすらと繰り出される白い絹糸のような声に聞きほれました。楽譜なしで歌われました。すばらしかったです。

1) ヴィヴァルディ「フルート協奏曲」より「カンタービレ」。2) ヘンデル「水上の音楽」より「アリア」。最後は「アンサンブル・スーパースターズ」、風岡和子さん(A)、大村健二さん(T)、宮城幸義さん(B)、白井均さん(B)によるフルート演奏(宮城さんはリコーダー)でした。4人で合わせるという至難のわざに挑戦。白井さん宅や風岡さん宅に集って[某有名フルーティストの指導を仰ぎながら]2回も合わせの練習をするなど、大変な努力をなさったようです。聴いている私たちも大いに楽しみましたが、それ以上に楽しんでいるのは演奏されている4人の方々だと思われ、うらやましく感じました。[ちなみに、某先生の名前は、ちゃんとした演奏ができるまでは、明かしてはいけないのだそうです。編集部註]

以上、野尻湖合宿での印象に残ったことのレポートでした。

野尻湖・神山教会コンサート

2011年8月6日、午後4時

バッハ・カンタータ第71番《主はわが君》
ブラームス《インテルメッツォ》(ピアノ独奏)
バッハ《ミサ曲口短調》より抜粋
バッハ・コラール(BWV 147より)客席とともに

合唱 = 東京バッハ合唱団
ピアノ = 内山亜希(伴奏/独奏)
指揮/訳詞 = 大村恵美子



「野尻湖の合宿の思い出」より カンタータ第 71 番

鈴木 敬子（団員：アルト）

1. 合唱

主、主 と呼びかける若々しいバッハの作品。八長調のド・ミ・ソの和音で元気よく始めると、次のイ短調のしんみりとした美しい部分は、[本番では]プロのソリストが歌う。6小節歌い終えたあと、コーラスは2小節をまたド・ミ・ソ・ミ・ドと声高く歌い、つづいて 救いを 地に とソリストの4重唱となる。バッハ得意の対位法が14小節あって、最後にふたたび、コーラスがティンパニーとともに8小節ばかり、主、主 と歌って結ぶ（今回、野尻湖では、全曲を合唱団員が歌った）

2. コラール（ソプラノ）付きアリア（テノール）

われ老いたり... 白き髪に... と、まるで私の歌だ。コラール われは世にあり かたく歩まん の旋律は天使のよう。美しい声が重なる。今回の演奏を聴いて、団員のソプラノのなんと素晴らしい声か!! と確信した。あの音色でまともれば、怖いものはない。

3. 四重唱

フーガ形式のバッハの極意であり、歌っていて緊張するが、本番では残念ながらソリストの分野。せめて今回、団員全員で歌えて本当によかった。

4. アリオージョ

昼も 夜も...、合唱団のバスの充実した歌声に胸をうたれた。本番ではこれもソリスト（何だかくやしい）

5. アリア

冒頭の みかもて を元気よく、ミーチカーラモテと複付点よろしく チカ をくっつけて歌うのが楽しくて、3回出てくるその部分が、帰ってきた今もぐるぐる頭の中をかけまわっている。これも本番では、私たちは

歌えない。しか

しアルトの人たちとのパート練習は楽しかった。

6. 合唱（鳩のように）

大村先生の大好きな歌。私も好きです。未曾有の大震災と放射能の见えない影に、おびえ苦しんでいる弱い人たち（とくに癌になることを怖れている子供）を、神様はお見捨てになることなく、安らかにお護りくださいと祈りつつ歌います。

7. 合唱

この曲もプロの方々の四重唱から始まり、ところどころコーラスが入る。この曲では、コーラスの活躍部分もかなり大きい。終りの部分でも、すこしコーラスは休ませてもらい、いよいよ最後の4小節を、合唱の全員が締めくくります。それにしても、この最後の部分をもっと張り切って歌い、オーボエとフルートが天に届けとばかり吹いたらいいなと思います。

余談

ご心配をかけた私の楽譜は、ちゃんと家にありました（スーツケースの横に）、ご迷惑を掛けました。ごめんなさい。新入団員のKさん、アルトのA子さんには、特別お世話になりました。大村先生をはじめ、この合唱団のためにお世話くださいました先輩のみなさま、よい思い出を本当にありがとうございました。

合宿および演奏会の顛末 テノールの場合

村山 英司（団員：テノール）

3年ぶりにおこなわれた野尻湖合宿は、初めての参加者も多く、盛況のうちに無事終了しました。

当合唱団の弱小パート＝テノールは、コアメンバー3人、見習い[合宿直前にバス声部から移籍]1人、お助け人[バス声部だが、補強のため必要に応じてテノールを歌う]1人の、実質4.0人体制(3.0+0.5+0.5)で参加しました。

でもテノールは目立つのです。今回でもカンタータ71番2曲目(ソプラノ/テノール)では、われらが高校生テナーをはじめ、皆でアリア「われ老いたり」を歌いましたが、多勢に無勢のソプラノを相手に二重唱を歌い上げ、今まででは一番良かった等お褒めもいただきました。見習いの私にとっては、練習回数も少なく冷や汗ものでし



た。今回は歌いませんでした。《口短調ミサ曲》の第1キリエの冒頭フーガや、後半開始のクレドの入りはテノールから始まります。したがって、当パートのでき次第ではこの大曲の前半および後半を、開始と同時にぶち壊すために陥らないとも限りません。現段階では、コアメンバーがずっこけるとみんなずっこける危険があります。

《口短調ミサ曲》は、カンタータに比べ、はるかに複雑で構造的で、各パートに主題と対位主題が受け渡される以外に、パート特有のテーマもあって、中声部では目立たないのですが、難しい部分です。バスで歌っていたときに、練習で他のパートのも聞いてはいるのですが、テノールがこんなにあくせくと働いているとは思いませんでした。あるパートだけひととおり歌えたからといって、バッハの大曲を理解したとはとても言えないということになります。

演奏会は、ピアニスト内山さんの奮闘もあって無事終わりました。ホテルへの帰路、バス車中の我々に向かって、外人さんたちがニコニコ手を振ってくれたのが印象的でした。私にとって今回の合宿は、顔は知っていてもお名前が分からない、話をしたことがない方々と少し気心が分かるようになったことが収穫です。逆に私が大酒のみで酒癖がよろしくないのも知られてしまったかもしれませんが.....。

最後になりますが、加藤さんはじめ、運営にあたられた多くの方々に感謝いたします。

野尻湖合宿に参加して

久保庭 重夫(団員:バス)

6月初めに合唱団に入団して以来2ヶ月しか経っておらず、私自身《口短調》を歌うのは始めてだったので、周りの人に助けられながら付いてゆくのやっという状態でした。そんな中、この合宿に参加して本番の演奏会を経験することが出来て、何か1ステップ上がった感じがしています。本番の緊張の中で自信がついたということかもしれません。そう、大村先生も折々に言っておられますが、毎週の練習を重ねていても本番を経験しなければ得られないものが確かにある、ということを実感したところです。

演奏会は、湖畔にたたずむ簡素な教会で、開演10分前位の時点では観客より合唱の人の方が多くなってしまふのでは、などと心配もしましたが杞憂でした。結局50

名以上の方々が合唱とピアノ独奏を熱心に聴いて下さいました。そして演奏会が終わると聴衆の方との交流もあり、このイベントがこの地にしっかりと根付いていることがよくわかりました。

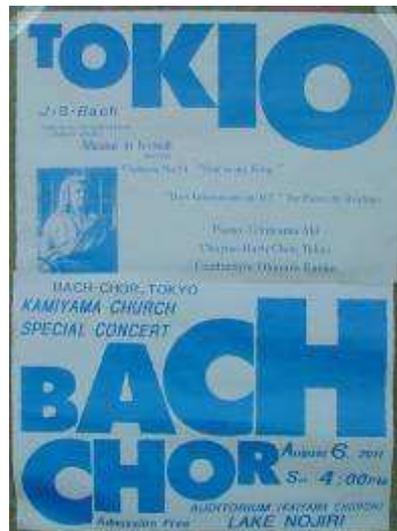
普段の練習ではなかなか機会が無い、違うパートの方々との交流が出来たこと

も大きな収穫でした。交流は行きの電車からもう始まり、合宿中の食事のテーブルでの会話、そして帰りの電車まで。実に多士済々の方々が居られるのには感心しました。これも毎週の練習のみではこんな機会もなく終わってしまう所でした。合唱の効用は音楽の楽しみのみならず、人との出会いも演出してくれることだとつくづく思っています。

そしてもう一つ印象に残ったのは、打ち上げの懇親会の時の会話の中での大村先生の宗教観の話でした。これだけバッハ一筋にやってこられた方が、キリスト教のみならず仏教にも共感を持たれているという話にはちょっと驚きましたが、実は私もそう思っているのも特に印象に残っています。バッハの理解にキリスト教の理解は欠かせませんが、一方で、宗教観の違いから血で血を洗うような争いを繰り返してきたヨーロッパの歴史を見ると、やはり何とかそのような争いを起こさない世の中に、と願わずにはいられません。もちろんそれぞれの宗教の間で優劣などあるはずも無いのですが、人間のみならず万物の調和を説く仏教の考え方は、「地に平和」のために有効なものではないでしょうか。バッハの音楽の宇宙的な広がりやと仏教の世界観は共鳴している感じを私は持っているのです。

ミニコンサートでは、私もオペラのアリアを1曲、内山さんの素敵な伴奏で歌わせて頂きましたが、芸達者が多く居られて楽しいひと時を過ごしました。

最後になりましたが、今回の合宿の企画から推進まで何から何までやって頂いた加藤さん、本当にありがとうございました。(2011年8月15日記)



お・た・よ・り

原田 知子(後援会員)

昨日、『コラール・ハンドブック』が大変に活躍したのでお知らせします。

オルガニスト早島万紀子さんを講師に、オルゲル・ピュッヒライン [オルガン小曲集] を月に一度6曲ずつワークショップ形式で勉強する会の最終回で、Alle Menschen müssen sterben を弾くことになり、歌詞を紹介しながらコラールを弾くのですが、『コラール・ハンドブック』の歌詞で歌うことにしたところ、訳を読むよりずっとわかりやすく好評でした。早島先生も、“コラールは歌うもの” という原点に戻ってとてもよかったと言ってくださり、何度も何度も出席者全員で合唱し、曲の理解が一層深まりました(歌っているうちにジーンときた、という友人もいました)。

オルゲル・ピュッヒラインは、コラールをしっかりと理解して弾かなくてはならない、ということを感じますが、なかなかドイツ語までは手が回らず、ただ訳を読んでもしっくりこないことが多く、これからは歌詞をつけて唄ってから練習することにしようと思います。とてもよい体験でしたので、ご報告します。

「村上春樹」とも出会った夏

大村 恵美子(主宰者)

「これ読んでごらん」と知人から渡されて『ノルウェイの森』(1987年)を読んだのが初めてで、それ以来ぐいぐいと有名になって、いくつもの賞を得てきた村上春樹。同姓の村上龍ともども、私自身はそれほど親しみを覚えないで来てしまったのだが、その春樹が2009年2月、エルサレム賞(イスラエル最高の文学賞)の受賞式でスピーチをし、「壁と卵があって、卵は壁にぶつかり割れる。そんなとき、自分は卵の側に立つ」と言って、世界中の話題となった。最近のスペイン・カタルーニャでの国際賞受賞式(2011年6月9日)でも、東京電力と「効率社会」を批判する印象的なスピーチを行なっている。いまや彼の新著は、発売前夜からファンの行列ができるというほどのポピュラーぶりである。

私は、そのような社会現象としても、少しは知ってみたいという気持ちで、この8月5~7日(2泊3日)3年ぶりに野尻湖合宿・コンサートが復活した機会に、その前後3日ずつ追加滞在して、彼の著作を何か読んでみることにした。合宿前は中軽井沢の妹の家で、手始めに『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985年)を、合宿後は野尻湖にとどまって、黒姫駅前の書店でみつけた『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』を読み足した。

中軽井沢では、小説にとりかかる前に、7月に刊行さ

第106回定期演奏会(創立50周年記念公演)

バッハ《口短調ミサ曲》

日本語演奏初演

チケット発売中

前売: 3500円(全席自由席)

事務局までお申し込みください

[日時] 2011年12月3日(土) 14:00開演

[会場] 杉並公会堂(東京・荻窪)

*

光野孝子(Soprano) 佐々木まり子(Alt) 鏡貴之(Tenor)

新見準平(Baß) 草間美也子(Orgel)

東京カンタータ室内管弦楽団(Orchester)

東京バッハ合唱団(Chor)

*

大村恵美子(指揮/訳詞)

<後援会員の皆さま>

ご招待状は、10月中にお手元に届きます。ご予約ください。

れたばかりの『漱石と春樹』(柴田勝二)なる評論もあらかじめ読んでおいた。しかし、果たして春樹の視点および力量が、漱石とあい並び評せられるものか、その他すべては未知数である。今後も、一般によくある例として、社会の趨勢に流されて、右に左にコロコロと舵取りが揺れるようなことはないのか、よく見極め、監視してゆきたいと考えている。作品自体についての私見は、早まらずに判断を重ねてゆきたい。

今年は、原発に対する真剣な態度が問われる年で、1945年夏の、敗戦の大きな一因となった原子爆弾被爆直後に、心ある識者、文化人とされる人々が、戦争の悲劇から平和志向へと、何とでもして好転させようと、思いきった原発受け入れ、擁護、促進へと、言を弄して(「原子力の平和利用」)心を無理にも飛躍させていった驚くべき事実が、振りかえられている。被爆の惨状をうったえる陣営すらが、原発利用に深くかかわっていたのを知らされて、彼らのなんとも切ない心情が、ひしひしと伝わってくるのだった。

今まで、どちらかの旗振りに加担してきた人々も、国民のメジャーな部分のように、無関心でおしてきたものも、いまや一斉に、新しい一歩を迫られることになった夏である。

野尻湖コンサートの後の昂揚した打ち上げの席で、いただきものの福島産の白桃菓子を、みんなと分けながら、徐々に敗戦後以来の大きな転換点に立つ気構えへの、千々に乱れた思いを共有した合宿でもありました。

ちなみに、私も、脱原発に賛同のメッセージを世に訴えた城南信用金庫に、これまでの別の信用金庫から鞍替えした。そのための書類の一項目として、変更理由が必要とのことで、「貴社の脱原発の姿勢に共鳴して」と書いた。了